書　　評

喜多野清一著『家と同族の基礎理論』

未来社，1976年，292＋Ⅳページ

本書は，喜多野清一が昭和26年～46年にかけて発表した八論文と，昭和50年に新たに書き下した二論文とを収録した論文集である．

その内容を簡単に紹介すると，同族結合の本質を系譜関係の相互認知としてとらえ，その本質にもとづく同族の扶養給付行為について論じた「同族組織と封建遺制」，「同族における系譜関係の意味」「同族の相互扶助」，有賀喜左衛門の家・家族論について批判的検討を加えるとともに，戸田貞三の小家族結合論の重要性を指摘した「日本の家と家族」，「有賀喜左衛門氏の「家族理論の家への適用」を読みて」（新稿），「戸田家族理論と『家族構成』」，鈴木栄太郎の村および家族についての論及「鈴木農村社会学における村と家」，「鈴木栄太郎博士の家族論」および及川　宏について論じた「及川　宏氏における同族と村落研究の展開」，「及川　宏氏の同族組織論における問題点」（新稿）の十論文になる．

ところで，喜多野の親族組織研究は，現代日本社会の解明にとってどのような意義をもっているのであろうか．社会人類学的親族組織研究と対比しつつ検討してみよう．

喜多野は，日本資本主義論争を背景にして，日本資本主義の基底をなす日本農村社会に独自な社会構造，つまり農民の階層構成の解明をめざしていた．この課題を解明すべく官庁統計資料を検討していたが，やがて統計的操作の限界を感じ，戸田らによる「分家慣行調査」に参加し諸調査の経験を通じて，日本農村を根底的に支えている独自な階層構成は，家の親族組織的構成と結びつけていかないと理解できないと考えるようになっていった．かかる問題意識の下に戦後に至っても甲州農山村を中心とする実証的研究を継続するとともに，家構造の二重性論，すなわち「家原則によって統合された家が同族結合に志向するとともに，家の家族集団としての諸契機が親族結合を志向し，親類関係を展開する」（『「家」と親族組織』）という家に内包する構造と親族組織との構造的連関およびその史的展開過程とを理論化するにいたったのである．一方，社会人類学的親族組織研究は，人類文化史，とりわけ日本民族の起源に関する研究が階級関係を基軸とした発展段階（内的発展段階）に関心が集中していたのに対して，歴史的過程に種族・民族的要素ないし条件を導入することによって古日本の文化＝社会論を展開した岡正雄の Kulturschiten in Alt-Japan の戦後における紹介を出発点として日本文化＝社会の構造（「同族制社会」と「年齢階梯制社会」）解明の一環として親族組織の実証的研究が進められてきた．その結果，この岡グループは，「同族制社会」＝祖先中心的な親族組織化＝「拡大型」ないしは「直系型」家族，「年齢階梯制社会」＝自己中心的な親族組織化＝「核心型」家族，という日本文化＝社会に内在する異質の構造を折出したのである（蒲生正男，「戦後日本社会の構造的変化の試論」）．

このように，前者が日本の家に内包する原理との関連で親族組織の構造とその史的展開過程とを展開してきたのに対し，後者は日本文化＝社会の多系性を念頭においた親族類型論を展開してきたように思われる．とすれば，「日常時間的現実と時間を超えた規定性との関係」，「民族と階級」，「段階的認識と類型的認識」といった問題が提起されている昨今，史的展開過程と地域類型とをふまえた親族組織論を再構築することこそが，現代日本の親族組織の深層を鮮明に抉りだすことになるであろうし，また，そのことこそが喜多野にとっての問題である日本資本主義社会に内在する構造と歴史を解明する一つの手がかりを与えるのではなかろうか．本書はその意味で，一定の限界をもっているとはいえ，現代日本社会に内在する基本原理を解明しようとする研究者にとって避けて通ることのできない論文集であるといえよう．　　（清水浩昭）